

# ユーモアの認知言語学的考察と コミュニケーション力育成への応用 —アメリカン コミック ストリップスを中心に—

ウィリアムズ 厚子 (大学教育基盤センター講師)

## 1. はじめに

コミュニケーションという言葉が学習指導要領の中で初めて使われたのは、平成元年改訂の時である。その背景には、グローバル化に伴う英語使用の重要性とコミュニケーション理論に基づく教授法の普及があったと言えるが、何よりも、それまでの英語教育に対する世論の批判が公的な変革へと突き動かしたことは自明である。

その後約 30 年の間に文部（科学）省による様々な実践的計画が導入され、授業の刷新や生徒のモチベーションの向上とともに、英語教育研究についても歴史的な発展が遂げられてきた。しかしながら、日本の中高生の英語によるコミュニケーション能力がどのくらい向上したのかは、その測定法の確立の困難さゆえに明らかではない。その原因の一つとして考えられるのが、コミュニケーションの定義の曖昧さである。コミュニケーションは一般に「伝達」や「交信」「意思の疎通」と日本語化されるが、目標とする能力を表すには不自然であり、意味領域が広すぎると言える。日本社会で「コミュニケーション」という言葉が一般的に使われているのは、そこに日本語訳以上の意味（あるいは期待）が含まれているからではないかと考える。

英語教育の文脈でコミュニケーション能力という用語が使われる時、「正確さ」よりも「流暢さ」を、「知識」よりも「積極性」が重視されていることは、学習指導要領の目標文からも明らかであるが、例えば、自己紹介や日常会話、ビジネスシーンでのやりとりやプレゼンテーション、ディベートなどにおいて流暢に英語で話せるということは、コミュニケーション能力が高いということに果たしてなるであろうか。

コミュニケーションの語源は **common**（共通の、共同の）であるが、ここには「何かを共有する」という概念が含まれている。後藤（1999、16 頁）は、『コミュニケーション』と『伝達』を等値とすることはできない。（中略）それは単なる『伝達』にとどまらず、『共有化』し『一体化』し『合一』することだと主張される」と述べている。つまり、単なる情報のやり取りではなく、価値観や思考の共有を基盤とした、人と人との精神的つながりこそがコミュニケーションの本質であると言える。このような「共感」を生む力、「つながり」を築く力こそ本来のコミュニケーション力であり、これからのさらなるボーダレス社会に最も必要とされていることであると考えられる。

「共感」のためのコミュニケーションにおいて重要なもののひとつがユーモアのセンスである。とりわけ英語圏においては、対話やスピーチにおけるユーモアの文化的価値は極めて高く、人間性や知性を映し出すものとされている。しかしながら、ユーモアは「感性」の問題であるがために学校教育の中で教えることは難しく、教科書や授業で扱われることがほとんどない。

ユーモアは言語や文化と密接な関係があり、その文化的価値は国により異なっている。海外の映画やトークショーなどで、サブタイトルを読んでも可笑しさが理解できなかつたり、英語話者との会話中に相手の話すジョークにうまく反応できなかつたりした経験は誰しもあると思われる。このことは、言語知識だけではユーモアを理解することは難しく、文化的な背景を基盤とした発想についての知識が必要であることを表している。

本稿では、アメリカのコマ割り漫画 *Peanuts* におけるユーモアを分析することにより、英語話者のもの見方と、コミュニケーションにおけるユーモアの重要性について認知言語学と心理学の視点から考察し、英語教育への一助とする。

## 2. ユーモアの学術的歴史と文化

古代ギリシャ・ローマの時代に、笑いや可笑しきは既に高い学術的な価値を得ている。例えばアリストテレス（前 384-322）は、笑いは上品で洗練されたものであるべきと主張し、『弁論術』の中で、可笑しみが聴き手の予想を裏切ることにあるという、現在のユーモア心理学における「不一致理論」につながる考察をしている。また、キケロ（前 106-43）は、『弁論家について』の中で弁論における機知の効果について、聴衆への好感という視点で論じている。キリスト教によって笑いが否定的にとらえられた中世が終わり、ルネッサンス以降、エラスムス、セルバンテスなど多くの哲学者や作家により、可笑しきは奇矯や風刺、ウィットなどの様々な諸相で欧米社会に浸透し、成熟した文化となった。また、ホブズ、グルーナー、ロック、ショーペンハウアー、フロイトなどにより、ユーモア論やウィット論など可笑しきは学術としても確立されていった。

ラテン語の「体液」を意味するユーモア（フモール）が現在の意味で使われるようになったのは、16 から 17 世紀イギリスに起こった「気質喜劇」からであると言われている。人の気質は体液の異常によるものであるということを喜劇で表現したものであるが、それ以降ユーモアは「体液」より「可笑しみ」の方を意味するようになる。そして、実社会においてもユーモアのセンスは個人の資質とみなされるようになり、今日欧米では性格の一部としてだけでなく社会生活における重要な能力に位置付けられている（雨宮、2016）。

社会生活におけるユーモアは、相手の心を和ませ、会話を弾ませるだけでなく、共通の可笑しみを感じることによる心理的な一体感を両者に与える。Martin (2007) は、ユーモアが個人的発達や認知だけでなく、教育や産業、さらには哲学や生理学に及ぶ研究といかに関連しているかを説いている。つまり、ユーモアは個人と個人、個人と社会の潤滑油で

あり、同時に社会規範の一端を担っていると言える。

一方、日本においても可笑しみの文化は、神話をはじめ能狂言や歌舞伎、狂歌、俳句、川柳、落語、説話、滑稽本、と多様な分野でそれぞれ成熟し、その文学的な価値は高いと言える。しかしながら、ユーモアが個人の資質や社会規範とはなっていない。雨宮(2016)は、日本の笑いの文化が「身体的」であること、日本が「場」による行動規範が優先される社会であること、さらに文書を基盤とした声の文化が未発達であることが原因であると述べている。中でも、「場」に対する規範意識は特に高く、「不謹慎」や「場違い」という言葉が日本社会の許容範囲を明確に区切っていることを表している。そのため、欧米のように皮肉や批評的なユーモアは一般化されず、声の文化としても発達しなかったと考えられる。

このように、欧米でのユーモアの文化的価値は日本とは異なっており、その違いは話し言葉や書き言葉などあらゆるコミュニケーションに反映されている。したがって、英語話者がユーモアをどのように捉えて実際に使っているのかを知ることは、著者や話者との間に共感を覚え、対話でのコミュニケーションを活性化し、より豊かな人間関係を構築することに繋がると言える。

### 3. 英語話者のものの見方

ユーモアは可笑しみの下位区分の1つであるが、それ以外にジョークやウィット（エスプリ、機知）と呼ばれているものがある。精選版日本国語大辞典（2006）は、ジョークは冗談やしゃれのことを、ウィットはその場に応じて気のきいたことを言ったりする才知、ユーモアは人を傷つけない上品な可笑しみやしゃれで、ゆとりや寛大さを伴うものと定義している。その境界は明確ではないが、欧米の文化で特徴的なのは、状況に合わせて即興的に使われる軽妙で辛辣なウィットに近いユーモアである。そのような英語話者のユーモアはどのような発想によるものかを考察する。

Sapir (1921) は、言語がその話者の世界観の形成に差異的に関与していると主張し、言語相対論（サピア＝ウォーフ仮説）を唱えている。これを軸として認知言語学では、言語による表現は、話者の脳内現象を反映しているという立場から、言葉の背後に存在する人間の認知能力に基づいて言葉の形式と意味の諸相を明らかにしていくアプローチをとっている（山梨、2019）。ここでは、言語形式の違いという観点から英語話者と日本語話者の「見え」について述べる。

英語と日本語の最も顕著な違いの1つは主語の存在である。文単位では英語には主語が必要であるが、日本語の場合はそうではない。例えば、“I see the rainbow.”という英語を日本語にすると、「虹が見える」となり、主語は「私は」という話者のことであることが想像できる。これは日本語が文脈依存型の言語であり、そのため相手との場の共通理解があるという前提で使用されるからである。英語は、文脈依存型言語ではなく、どのような

場合でも必ず動作主と動作、そしてその対象が必要である。対象の共通理解が言語によって成り立っていることは、冠詞 *a* と *the* の使い方の違いからも容易に理解できる。主語のあり方における両者の脳内現象という点から考察すると、自分が出来事について話す時、「私」を省略する日本語話者は、自分自身が出来事の中に存在した状態で話しているのに対し、英語話者は、主語を置くことによって自分自身が出来事に関わることを別の視点で見ていると言える。つまり、英語話者は自分自身を客体化したメタ認知的な現象が脳内に起こっていると考えられる。このような「事態把握」は主観的把握と客観的把握があり、話者がどちらのスタンスをとるかは言語によって異なっている (Langacker, 1985、黒滝、2019)。主語を言語化しない日本語話者は主観的把握をしていると考えられる。一方、英語話者は自己を事態の外に置くことで、聞き手に対して客観的に把握し伝達をしていると言える。このような思考の構図を黒滝 (2019) は以下のように図式化している。

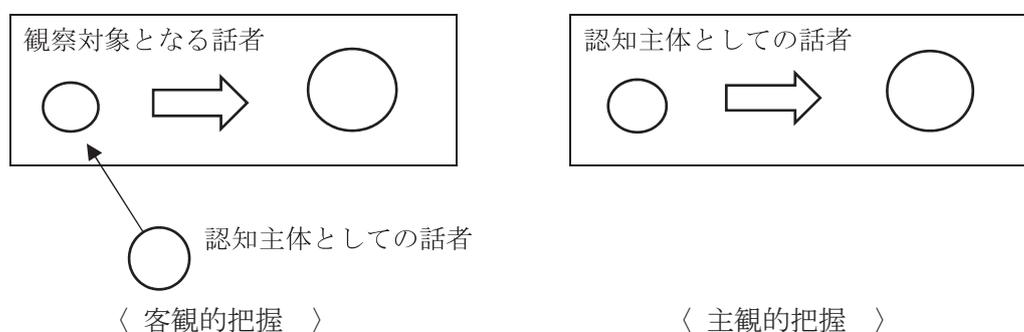


図1 事態把握の2種類のスタンス

出典：黒滝 (2019)

また、濱田 (2019) は、認知的処理の違いを右脳と左脳の言語活動の違いで説明をしている。日本語話者が左脳で出来事を直接捉えるのに対し、英語話者は右脳の空間的な処理を先に行い、その後に言語脳とされる左脳で理解すると述べている。このことから、英語話者が言語化する前に右脳で出来事の全体を客観的に捉えていると考えられる。

このような処理の違いは、日本人英語学習者の学習過程において顕著に現れる。例えば、英語の間接話法は、話者が第三者の言葉を客観的な視点で伝える、日本語にはない表現である。そのため、日本人学習者の多くがこのような伝え方を苦手とし、高等学校英語で扱われる直接話法と間接話法の書き換えは、逐語的にルール化された法則の暗記に頼る場合が多い。また、よく挙げられる視点の例として、自分のいる場所を尋ねる表現の違いがある。英語では“Where am I?”とその場にいる自己が主語となるが、日本語では「ここはどこですか。」となり、主語は自己ではなく、自己を含めた空間となる。そのため、日本人学習者の多くが母語の影響を受け、英語で“Where is this place?”と表現する。このように日本語と英語の違いは、事態把握における認知プロセスに反映されている。

## 4. Peanuts とは

英語話者の客観的事態把握は、ユーモアの発想と極めて強く繋がっている。ここでは、アメリカの漫画 Peanuts を例に、コミックストリップのパンチラインを分析することにより、英語話者のユーモアについて考察する。

Peanuts は、アメリカの新聞 7 紙に 1950 年から 2000 年まで毎日掲載された世界的に有名な新聞漫画である。75 か国 21 言語に翻訳され、今も世界中で読まれ映画化もされている。日本ではスヌーピーとして知られる人気のキャラクターであるが、漫画を読んだことのある日本人は極めて少ない。本学 1、2 年生 107 人を対象に調査をした結果、好きなキャラクターであると答えた人は 92%であったが、漫画を読んだことがある人はわずか 28%であった (2019 年調査)。日本は世界最大のキャラクター商品市場であり、翻訳本も出版され、漫画文化も成熟しているにも拘わらずほとんど読まれていない。2019 年の授業において、日本語訳をつけた Peanuts の漫画を課題として 1 学期間に前期 42 話、後期 32 話を読んでもらい、毎回感想を書いてもらった。その中で否定的な感想のほとんどは、「漫画のパンチラインにあまり面白さを感じない」ということであった。これが日本人に読まれない理由と考えられる。

Peanuts はデフォルメされた絵によって子供の日常を描いたものではあるが、子供向けの所謂スラップスティックではなく、新聞読者である大人を対象にした漫画である。そのため、パンチラインの多くは皮肉的で哲学的なものが多い。したがって、Peanuts のユーモアは、日本語話者とは異なる、英語話者特有の認知プロセスが反映されていると言える。

## 5. Peanuts のユーモア

### 5-1. 談話にあるパンチライン

ここでは、Peanuts のコマ割り漫画 15 話のパンチラインについて考察する。会話文を対象とするため、絵のユーモアが含まれたストリップス以外を取り上げる。原文は英語であるが、発想を分析するため、だじゃれなどの言語的なユーモアも除外した。下線部の文をパンチラインとする。また、話者のチャーリー・ブラウンはチャーリーと略する。以下すべて筆者訳。

#### (1) 1954.03.27

チャーリー：みんなが僕を笑ってるような気がするんだ。

ヴァイオレット：いつも？

チャーリー：うん、だいたいね。笑わないのは、僕が笑わせようとしている時だけなんだ。

#### (2) 1961.09.08

ライナス：僕はまだ小さいから姉さんを殴れないけど、すぐに姉さんより大きくなって殴れるようになるからね。

ルーシー：あら、その頃私はレディよ。レディを殴ることはできないわ。残念でした。

ライナス：まるでインチキな切り方されたトランプの中にいるみたいだ。

(3) 1963.02.14

チャーリー：あーあ、誰も僕にバレンタインをくれない。バレンタインなんてなければいいのに。僕を好きな人はいないんだ。どうして僕はバレンタインの日にそれを強調しなくちゃいけないんだ！

(4) 1965.01.07

ルーシー：嫌な天気！

ライナス：また文句ばかり！年中不平ばかり言ってるんだね。

ルーシー：何がいけないのよ。これは私の唯一の得意技なのよ！

(5) 1962.10.26

ライナス：僕とパパは昨夜すごい神学論争に巻き込まれたんだ。通知表を見て、どうして僕だけスペリングでAを取れなかったのかって。僕はこう言ったんだ。「地球上のみんなが少しずつ違っているなんて素敵じゃない？」って。それが神学論争の始まりさ。

(6) 1984.03.03 (チャーリーを相手に電話で)

ペパーミント・パティ：「ヤングコンサート」よ。例のほら、子供たちをいい音楽に親しませるってやつよ。最初は行きたくなかったの。でも音楽を聴いたら行ってみようかなって思って。で、どうなったと思う？ 500語のコンサートの感想文を書くことになったのよ。でもね、そのために教育ってあるのよね。私たちが楽しめないようにするの。

(7) 1990.12.06

チャーリー：もし、ペギー・ジーンにクリスマスプレゼントを買う 25 ドルが欲しいなら、スヌーピーを売ってルーシーが言うんだ。

サリー：なんていい考えなの！（サリーはスヌーピーの水皿を頭からかぶる）

チャーリー：彼が水皿をこぼしたのを初めて見たよ。

(8) 1995.02.07

チャーリー：どうしてかなあ。孤独を感じる人が多いんだ。

ルーシー：ダンスでも習ったらどう？

チャーリー：ダンス？でも、誰も僕とダンスしてくれなかったら？

ルーシー：じゃあ、ダンスのできる孤独な人になれるわ。

(9) 1966.09.05

ペパーミント・パティ：バカみたい！私は5本もホームランを打って、敵をノーヒットにおさえたのに。37対5で負けるなんて！37点なんて聞いたことないわ！バカみたい！

あんたのチームを助けられると思ったけど無理だわ。私、帰るわ！

チャーリー：帰れるっていいよな・・・

(10) 1962.02.06

チャーリー：メガネかけないといけないなんて気の毒だな、ライナス。

ライナス：そんなことないよ。前は存在していることすら気付かなかったものが見えるんだから。例えばルーシー姉さんだ。姉さんがこんなに美人だったとは知らなかった。

ルーシー：メガネで視力だけじゃなくて皮肉まで改善してるわ。

(11) 1986.05.09

サリー：宿題手伝ってくれたら、私の秘密の宝物をあげるって約束するわ。

チャーリー：宝物っていくらぐらいの？

サリー：それを言ったら、秘密じゃなくなるわ。

(宿題を手伝うチャーリーを見ながら) お兄ちゃんがこういうことに弱いのに  
は感心するわ。

(12) 1976.06.19

チャーリー：スヌーピーからの手紙だ！

サリー：無事なの？どこにいるの？なんて書いてきたの？

チャーリー：“親愛なる丸坊主の子へ・・・？” せめて僕の名前くらい覚えてる犬をど  
うして飼えないんだろ。

(13) 1988.01.26

チャーリー：(スヌーピーに対して) 僕たちはもっと一緒に何かすべきだってルーシーが言ってる。そうすれば、僕の落ち込みも治るかもしれないって。チェッカーでも一緒にやってくれる？

スヌーピー：しかも、僕がわざと負けなきゃいけないんだよね。

(14) 1996.09.05

ルーシー：(ベッドの下に隠れた弟に対して) いいわ、そこにいなさい！もう知らない。(学校で先生に) いいえ、先生、弟は欠席です。ベッドの下から出てこないんです。

ライナス：(ベッドの下に隠れたまま) 幼稚園に行って成功しなかった子を僕はいっぱい知ってる。

(15) 1982.09.21

ライナス：どんなことも永遠に続きはしない。どんないいことも必ずいつかは終わるんだ。

チャーリー：いいことはいつ始まるの？

## 5-2. 分析

(1) は、自分が笑われる理由を分析したり直接的に自分の感情を述べたりするのではな

く、周りとの関係を外から見た自虐的ユーモアである。

(2)、(3)、(4) は、苦しい状況の中にいる自分自身を客観的に捉えた表現である。本来ならば、「悔しい(2)」、「悲しい(3)」、「腹が立つ(4)」というような言葉を発するところであるが、(1)と同じように自己を客体化することで主観的な感情をゼロ化している。

(5) から(11) は、それぞれの状況を冷静に別の角度から捉え直している。(5) は、父親に叱られたことに対する言い訳や怒りをゼロ化し、出来事を「神学論争(答えのない論争)」と客観的に表現することによって、父親と対等の状態に成就させている。(6) は、感想文を書かされたことに対する不平を、「教育」というマクロ的視点で皮肉に置き換えている。(7) は、スヌーピーが水皿を妹に投げつけたという事実に対して驚きを表すことなく、焦点をずらして冷静に出来事を語っている。(8) は、「ダンスが孤独を解決するかもしれない」という相談者の前提とは全く異なる発想で、問題の焦点をコーピングしている。(9) は、相手の怒りに反応するのではなく、当事者としての悲哀を現実逃避の願望で表したせりふである。

(10) は、相手の皮肉に対し、事実を巨視的に捉えることで自分の怒りをゼロ化している。

(11) は、宿題を手伝ってくれたことへの喜びから逸れて、兄の行動を客観的に見つめて揶揄している。

(12) と(13) は、自分自身を含めた出来事を客観的に捉えた言葉である。(12) は、手紙の相手を非難するのではなく、自分の非を逆説的な言辞で事実を述べている。(13) は、飼い主の悩みを解決するための自分の行動をさらに客観視した発言である。

(14) と(15) は、相手との参照点の違いにより述べられた言葉である。(14) は、自分の行動の正統性を逆説的に述べている。(15) は、相手の論理を自己に当てはめて自虐的に述べた言葉である。

### 5-3. 考察

これらのストリップスは一部に過ぎないが、**Peanuts** のユーモアの大部分が、メタ認知や自己の客体化、出来事の客観的把握など、通常視点である参照点のずれによるものである。これは、ユーモア心理学において大別される、3つの理論「優越理論」「不一致理論」「エネルギー理論」の中の「不一致理論」に当たる。「不一致理論」とは、予期されたことがずれることによって滑稽さが生まれるという理論である。**Peanuts** 中の人物は、出来事に対し怒りや悲しみや失望を感じるはずの通常思考回路から逸れ、別の視点からの発想によってその出来事を可笑しみに変えている。しかしながら、単に視点のずれによるユーモアだけでなく、それぞれのパンチラインに、冷静さ、健気さ、寛容が感じられる。これらのパンチラインには、諧謔を呈することで否定的な感情を打ち消し、肯定的な感情を生み出す認知プロセスが働いていると言える。

新聞漫画は、本来その時代の社会を映し出し、何らかのメッセージ性を持つものである

が、Peanuts のストリップスには 70 年という時代の変化も、社会批評もほとんど表れてはいない。しがしながら、仮に Peanuts にメッセージ性があるとすれば、それは、ユーモアが人間関係を円滑にし、前向きに生きるための普遍的なコツを暗示しているということであると考える。それが、世界中で世代を超えて読まれている理由であるとも言える。

## 6. 実践授業の結果から

### 6-1. Communicative English I II III IVの受講生の感想と考察

2019 年度前期 5 クラス後期 5 クラスの授業で Peanuts の 4 コマ漫画を毎週 4 話ずつ前期 42 話、後期 32 話を読んでもらい、せりふの英語と文化的背景、およびユーモアについて説明した。以下は、学期終了時に受講生に書いてもらった感想の中でユーモアについて述べているものである。

- ・ユーモアが哲学的である。
- ・オチがわからないところあり、大人の漫画だと思った。
- ・教科書にはない英語のオチについて学ぶことができた。
- ・絵でなく言葉で笑わせようとする漫画である。
- ・英語が分かってオチの意味を推測するのに時間がかかる。
- ・ユーモアや文化を知ると内容が深く理解できる。
- ・オチは好きなところが多かった。
- ・よく分からないユーモアがいくつかあったが、共感できるものもあって面白かった。
- ・笑いのポイントが最初は難しかったが、慣れてくるとオチが分かるようになった。
- ・思っていたよりも内容が大人っぽくて面白かった。
- ・子供向けのものと思っていたが、意外とブラックジョークが多く大人でも読むことができるのだとわかった。
- ・教科書より楽しいため、やる気がでた。
- ・アメリカの文化をふまえた上でのジョークが分かってくると、どんどん興味が沸いた。
- ・最初は子供が見るような漫画だと思っていたが、しっかり読もうとすると、それなりの教養が要求されるのだと知って驚いた。
- ・回数を重ねていくと面白く読めるようになった。
- ・哲学的な内容の話は、訳は難しかったがとても面白いと感じた。
- ・大人の面白さがあり、好みだった。
- ・直接的に物事を言わずに、濁しているユーモアが多かった。
- ・ユーモアと哲学を良い具合に混ぜていてついつい読みたくなる。
- ・ユーモアが難しい分、理解できた時の感動があった。
- ・言葉遊び的なジョークは、日本のノリやフリとは異なっている。
- ・4 コマ漫画なのでしっかりオチがあり面白かった。
- ・アメリカのユーモアや言葉遊びを知ることができた。

- ・ユーモアは哲学的で真理をついた発言が多くて予想外だった。
- ・ユーモアがとても印象に残る。
- ・ただかわいい絵だけの内容ではないことが分かった。
- ・日本人にはない言葉選びや行動で、やはり海外のものは違うと感じた。
- ・キャラクターの考え方は哲学めいているのに行動は子供っぽく読みづらい。
- ・英語ならではの韻を踏んだものや諺や名言がユーモアとして出てくるのでいろいろなことを学べてよかった。
- ・哲学的でブラックユーモアも多く全般的にとっても面白かった。頭に入りやすかった。
- ・つつこみのある日本の漫画を読み慣れているため、今一つ楽しめないのかもしれない。
- ・難しいユーモアもあったが、楽しみながら勉強できた。
- ・アメリカ独特の言い回しや皮肉が面白かった。
- ・読んでいると外国人の考え方に近づける気がする。
- ・英語をこんなふうに使うとユーモアのある文になるのかと思った。
- ・日本人の感性とは異なると感じた。
- ・どれも面白くて英語の勉強が楽しくできた。
- ・言葉の掛けの面白さはよく話からなかったが、つつこみどころがあるのは面白かった。
- ・日本のユーモアとアメリカのユーモアの差があり、新しい発見があった。
- ・日本の4コマ漫画と違い、起承転結の結が分かりにくい。

これらの感想文から、受講生の多くが **Peanuts** のユーモアは日本の漫画のユーモアとは異なっており、リアルタイムでユーモアを堪能するには難しいと感じていることがわかる。また、感想文に頻繁に使われている「哲学」とは、登場人物の「発想」と考えられる。「発想」とは「ものの見方」であり、受講生自身の見方と異なるものであったことがわかる。しかしながら、受講生の多くがその意外性の発見を楽しみに変えており、ユーモアそのものの理解も回を重ねるごとに容易になってきているのが読み取れる。

前期 42 話を読み終えた後に、今後 **Peanuts** の英語版をさらに読んでみたいと思うかどうかという問に「ぜひ読んでみたい」「読んでみたい」「あまり思わない」「読まないと思う」の中から 1 つを選択してもらった。図 2 が表しているように、受講生 107 名の 72% が授業で扱う前に「読んだことがない」という回答であったが、図 3 に示すように、授業終了後には 77% の受講生から「もっと読んでみたい」という回答を得た。

後期 1 学期間で 32 話を読み終えた後に実施したアンケートの結果を図 4 に示す。回答は、各質問項目を適応度により 5 ～ 1 の数値形式で選択してもらった。グラフは適応度の高い 5 と 4 がクラス内で占める割合である。英語の基礎力により、**Peanuts** におけるユーモアのとらえ方や内容の理解は異なっているが、どのクラスも共通して受講者の多くが「日常会話表現をもっと勉強したくなった」と回答している。

後期 5 クラスのうちの 2 クラスは前期からの同クラスであったため、結果的に前期後期

の1年間を通して74話を読んだことになる。この2クラスには、英語に対する苦手意識が高く、英語学習経験が十分ではない学生が多かった。彼らのコミュニケーション力の変化は、既に述べたように、客観的に測ることができないことと、Peanutsの課題以外の影響（授業での演習や受講生の個人的な学習）が含まれるため、比較することは困難である。しかしながら、前期と後期を通して授業への参加態度などを基に筆者が主観的に判断したことは以下の通りである。

- ① 英語による Question and Answer の反応が速くなった
- ② 会話表現に対する関心が高まった
- ③ Peanuts の漫画を深く読むことができユーモアを楽しむようになった

①は、授業開始時に出欠の確認とともに行う一問一答から、②は授業全般を通じた受講者の反応から、③は毎回の読後感想文から、それぞれ判断した。前述のように、上記①、②についてはPeanutsが影響したとは必ずしも言えないが、漫画のユーモアを通して英語に対する親密度が高まった可能性がある。

図4の解答者 T n=40 が年間を通して74話を読んだ受講生である。英語を苦手としているが、Peanutsにおける「哲学が印象に残った」「英語が分かればもっと読みたい」の割合が他の項目に比べて高くなっている。この結果が筆者の観測①、②、③を少なからず裏付けていると言える。また、同クラスで前期と後期に実施したアンケートのうち、「ユーモアを面白いと感じた」「アメリカの文化に興味を持った」「キャラクターの哲学が印象的だった」「キャラクターの心理に共感が持てた」の4項目について比較をした。数値は前期後期ともに、各項目の適応5と4を回答した人のクラス内の割合である。図5から、Peanutsの登場人物の心理に共感し、ユーモアを楽しむことができたのは半数ほどであるが、7割以上の受講者が登場人物の哲学、即ち「ものの見方」についてなんらかの発見をしていることが読み取れる。このような結果が、会話表現を学ぶことへのモチベーションにつながっているのではないかと筆者は考える。

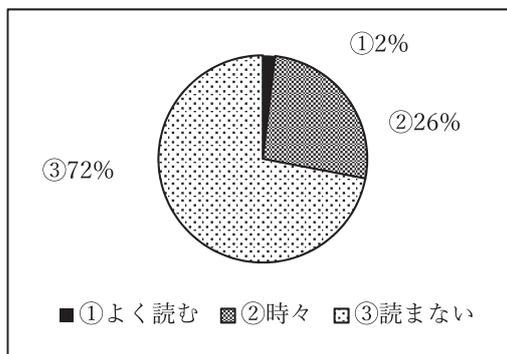


図2 授業開始前の Peanuts 読書経験 (n=107)

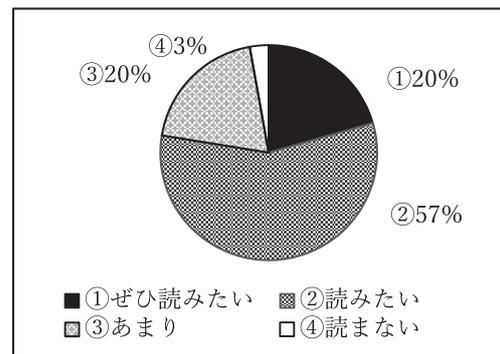


図3 Peanuts 42話読後の今後の希望 (n=107)

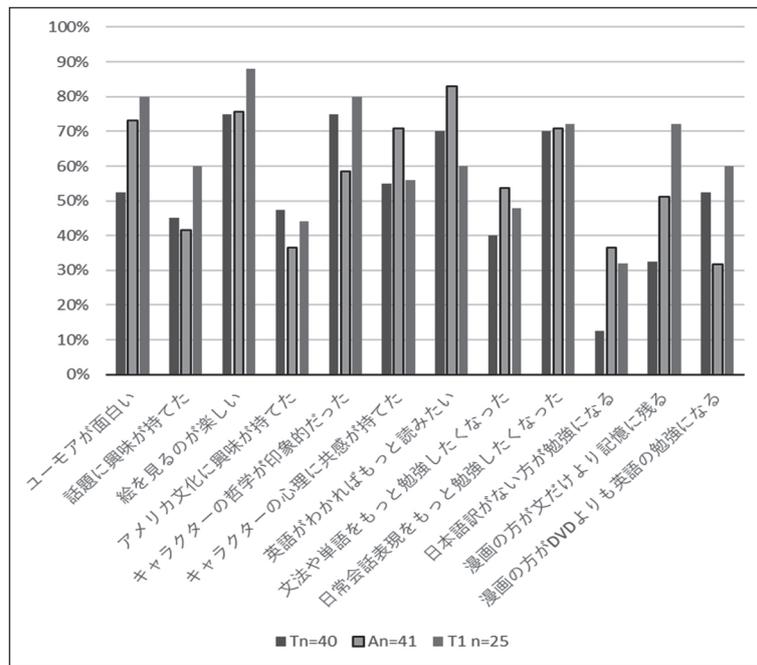


図 4 Peanuts 読後アンケート結果 (A n=41 と T1 n=25 は 32 話 T n=40 は 74 話)

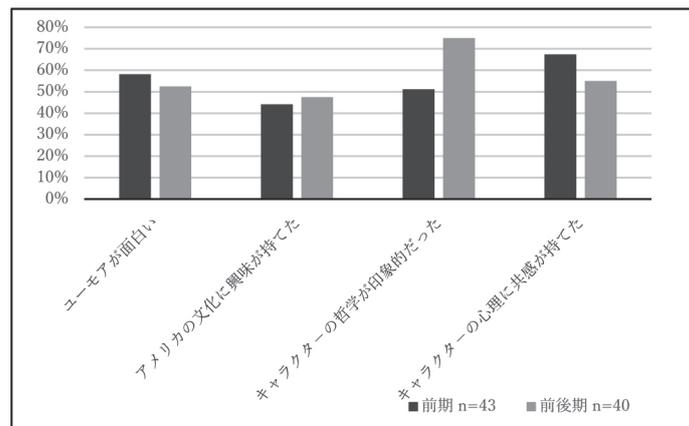


図 5 同一クラスの前期 32 話と前後期 74 話の読後アンケート結果

## 6-2. 「書物との出会い」の受講者の感想

「書物と出会い (ハ)」は、映像や絵画などを通して知的読書による学問的な発見を目標とした科目である。異なる担当者とテーマによるリレー形式の授業で、2020 年の前期の授業で 2 回を担当した。受講生は全学年全学部からの、概ね読書に対する意識の高い学生 39 名から成るものであった。授業では本稿で扱った 15 話を含めた 20 話のユーモアを分析し、オチのとらえ方や文化的言語的背景について日本と欧米でのユーモアを比較しながら説明した。授業レポートから、物の見方を理解することで内容を楽しむことができたことが読み取れた。以下は 1 受講生の 2 回目授業後に提出された感想文である。

『もう一度漫画を読んで解説を読んでいきました。一回目に読んでいたものと本当に同じものかと疑うくらい二重三重におもしろさがあり奥深さに驚きました。大学生になって私は英語の講座を複数とっており、外国人を相手に話したりメールをやり取りしたりしていく中でいろいろな感覚の違いを日々実感していました。自分や物事を客観的に見ている *Peanuts* の登場人物は感情的にならずもっと広い視野で物事を見ているようでした。私を含めた、周囲の世界と大きなギャップを感じたのは、そんな考え方の違いからだったことに気づかされました。先生の解説の最後の方に日本語では「私は」の主語が省略されていることについてのお話がありました。それにはものすごく興味が湧いたので、レポートではこれらについて知識を深めたいと思います。』

## 7. コミュニケーション力育成のために

ユーモア研究は多岐にわたる分野で行われてきたが、とりわけ外国語教育や異文化理解教育においてユーモアを取り入れる研究が進んでいる。*Vaage (2016)* は、日米のジョークの構造を比較し、違いを日本語学習と英語学習に取り入れた授業のケーススタディを紹介している。英語話者は、所謂「ボケ」に対して「ツッコミ」を明確にしていないという分析は、*Peanuts* のパンチラインにも当てはまるものがあり、英語のユーモアを理解する上で示唆に富むものである。世界のジョークや皮肉を分類し体系的にまとめた本も数多く出版されているが、外国語学習への応用を目的として言語的視点から研究したものは少なく、今後さらなる研究が望まれる。

筆者の調査結果から、ユーモアは文化的な背景が異なると、理解することが困難であり、コミュニケーションの壁になることもあるということが明らかになった。しかしながら、ユーモアの構造やものの見方を理解し、継続的に聞いたり読んだりすることでユーモアの感性が磨かれる可能性があることも示されたと言える。そうすることが、積極的にコミュニケーションをしようとする態度に繋がるということも調査結果が表している。

## 8. おわりに

「気質」を語源とする「ユーモア」は、イギリス演劇における言葉の機知という技法によって、直接的な可笑しみから理性的でヒューマニステックな風刺へと発展した。そこには、物事を俯瞰的に観察し、自我を抑制した客観性と公正さがある。また、フランス文化に流れを汲む鋭敏な知性も含まれる。斯くて可笑しみは「語られず」に暗示され、聞く人の感性に委ねられるようになった。英語話者のユーモアにはそのような精神文化が連綿と受け継がれている。

キケロは『弁論家について』の中で、「感性を教え伝えることはできない」と述べている。ユーモアも感性である。また、英語話者のように当意即妙にユーモアを発するには、

ある程度の語学力も必要である。そして、日本語話者にとっては、日本独特の場の捉え方や社会規範も無視されるべきではない。しかしながら、感性は「磨く」ものであり、ユーモアは相手との心理的絆をもたらすコミュニケーションのためのスキルであると考えられる。

## 参考文献

- アリストテレス (1992) 『弁論術』 戸塚七郎 (訳) 岩波文庫、岩波書店。
- 雨宮俊彦 (2016) 『笑いと言語の心理学 何が可笑しいの?』 ミネルヴァ書房。
- 後藤将之 (1999) 『コミュニケーション論 愛と不信をめぐるいくつかの考察』 中公新書。
- 濱田英人 (2016) 『認知と言語 日本語の世界・英語の世界』 開拓社。
- 濱田英人 (2019) 『脳のしくみが解れば英語がみえる』 開拓社。
- キケロ (2005) 『弁論家について (上) (下)』 大西英文 (訳) 岩波文庫、岩波書店。
- 黒滝真理子 (2019) 『事態の捉え方と述語のかたち 英語から見た日本語』 開拓社。
- Langacker, R. W. (1985). Observations and Speculations on Subjectivity. In: J. Haiman (Ed.), *Iconicity in Syntax* (pp. 109-150). Benjamins.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor: An integrative approach*. Academic Press. (野村亮太・雨宮俊彦・丸野俊一 (監訳) (2011) 『ユーモア心理学ハンドブック』 北大路書房。)
- 森下伸也 (2003) 『もっと笑うためのユーモア学入門』 新曜社。
- Sapir, E. (1921). *Language: An Introduction to the Study of Speech*, Harcourt Brace Jovanovich (安藤貞雄 (訳) (1998) 『言語ーことばの研究序説』 岩波文庫、岩波書店。)
- チャールズ・M・シュルツ (2015) 『スヌーピー コミック セレクション 50's ~ 90's』 谷川俊太郎 (訳) 角川書店。
- チャールズ・M・シュルツ (2019) 『スヌーピーのもっと気楽に 2』 谷川俊太郎 (訳) 朝日文庫。
- 『精選版日本国語大辞典』 (2006) 小学館。
- Vaage, Goran (2016) 「外国語のユーモア教育について：日本語学習者対象の授業および英語学習者対象の授業のケーススタディから」『大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究』 (14)、11-21 頁。
- 山梨正明 (2019) 『日・英語の発想と論理 認知モードの対象分析』 開拓社。